

Afternoon Music

William Gillock
2022.2.1 No.88

<https://www.gillock.jp/>

<http://www.facebook.com/GillockAssociationOfJapan>

日本ギロック協会会報[アフタヌーン・ミュージック]第88号

©William Gillock Association of Japan

YouTubeでも大活躍！ギロックの会員なんです☆

ジェイコブ・コーラーさんに インタビュー



聞き手/編集部・前田(以下M)：ジェイコブさん、2013年7月以来の会報誌、ご登場です。その当時はアリゾナ州から日本へお引っ越しされて、横浜でピアノ教室を開いたとのことを教えてくださいました。現在はどのような活動をしていらっしゃるのでしょうか？

ジェイコブ・コーラーさん(以下J)：今はピアニスト/YouTuberとして日本全国で活動しながら蒲田でピアノ教室もやっています。Piano Bopという子供向けのピアノ教材、楽譜集、CD制作もやっています。最近もたくさんのミュージシャンとコラボしたりしています。

M：ピアニスト、YouTube活動は大変有名でいらっしゃいますが、ピアノ教師としての活動もされているんですね。

J：ずいぶん前から新しい生徒さんの受け入れはしていないのですが、長くレッスンに通っている生徒さんを今でも教え続けています。ピアノの基礎を教えながら、即興演奏、アレンジ、時々大人向けのジャズピアノセミナーや先生向けのセミナーもやっています。今後は教材や先生向けのセミナーを中心に活動していこうと思っています。

2022年は計3回にわたり、ギロックの会員でもあるジェイコブ・コーラーさんにインタビューをさせて頂くことになりました。(時は2月・ヴァレンタインの季節に第1回目のご登場なんて・ステキです♪)

ジェイコブさん、実は、初めまして、ではなかったのです。2013年7月号の会報誌にインタビュー記事を掲載させて頂きました。ギロックの印象や、アメリカと日本のレッスンのこと、この先、ご自身のアイデアを伝えていきたいことなど、とても丁寧に答えて頂きました。



↑アフタヌーンミュージック第60号
(2013年7月1日発行)より



長年子ども達に即興演奏を教えていて、いろいろな意味で良いことがあります。習い始めの子どもの頃から即興演奏を教えると、即興演奏に全く抵抗がなく、一番良い時期だと思います。

即興演奏というのは難しいイメージがあるのですが、はじめはピアノで楽しく遊ぶというイメージ、そしてそれを少しずつ変えれば良いと思います。

M：子どもの生徒さんが遊びから入る時は、何かサンプルになる曲や歌などがあるのでしょうか？

J：一番最初に教える曲は「Music Safari」という曲です。動物のイメージをしながらピアノで自由に弾く曲です。

<参考YouTubeアドレス>

<https://youtu.be/YBdTeCM1I7E>
レッスン中

https://youtu.be/9_eXjRn_CT4
音源

レベルは違うのですが、プロジャズミュージシャンが自由に（アドリブ）弾く時に遊んでいる気持ちで演奏しています。生徒たちはレッスンで、たかさんのことを勉強してきたので、自由に弾く時にも勉強してきたことが自然に出てくるので良い音になるはず。演奏中に考えすぎると自然な演奏にな

ならないです。プロも子どもも「遊び心」が一緒です。言葉で日常的な会話するみたいな感じです。何を言うかは決まっていないのですが、その場で考えていることを言葉で表現します。即興演奏はそういう風を考えれば良いと思います。

M：遊びを超えたとき、上達していったその先には、生徒さんはどのようなスタイルの演奏や学びがあるのでしょうか？

J：レッスンでは同時に譜読み、即興演奏、技術などを教えています。

「ポップス」「クラシック」「ジャズ」どのスタイルでも同じように教えるのが良いと思います。レベルが高くなっても即興演奏（ピアノで遊ぶ）という気持ちをずっと大切にしたいと思います。

ピアノレッスンの中に即興演奏を取り組むことが当たり前になるために、頑張っていきたいと思います。

M：ジェイコブさんは、ギロック作品を楽しまれたり、レッスンで使ったり、という機会をお持ちでしょうか？

J：ギロックは使っています。発表会でギロックの曲を演奏してもらったり、大人の生徒さんにもギロックの曲を弾いてもらったりしています。ギロック

の作品は、それぞれの曲のイメージがはっきりしていて、音楽的、技術的にも素晴らしい曲ばかりです。私が特に好きな曲は「秋のスケッチ（Autumn Sketch）」「聖日（Fiesta）」「フラメンコ（Flamenco）」「サマータイムブルース（Summertime Blues）」です。（ありがとうございました。次回もお楽しみに！）



対面の定例会が待ち遠しい 【札幌支部】

札幌は一面の雪景色。雪かきにはウンザリですが、雪が上がった後の暖かい日差しに照らされた雪は、とても綺麗です。そんな日は素敵に弾けそうな気がしてきます。

札幌支部はオンラインでの定例会を続けていますが、そろそろ対面で出来ないかと検討を始めたところです。現在「こどものためのアルバム」「野うさぎのラグタイム」、少しずつですが「ピアノ・オール・ザ・ウェイ」に取り組んでいます。

12月はクリスマスの特別な定例会でした。「こどものためのアルバム」を弾いた後、いつもと趣向を変えて、クリスマスの曲から各自好きな曲を弾きました。新年最初の定例会も、ギロックファミリーの作品から、各自好きな曲を弾いて楽しめます。いつものように同じ曲を弾き合うのも、みんな違って色々な気づきがあり、イメージが広がって楽しいですが、たまに好きな曲を弾いて良いよと言われると、曲選びからテンションが上がります♪知らなかった曲に出会い、掘り出し物を見つけて嬉しくなったり、改めて良い曲だなあと思ったり、とても楽しいひと時です。各支部の皆さん、札幌支部とオンラインで繋がりませんか？

（記/児玉ひろみ）



ギロ友クリスマスコンサート 【柏支部】



昨年もコロナ禍が続く1年でしたが、ズーム、オンライン、対面、FBライブ配信を使い、毎月定例会を開催することができました。1年の締めくくりとして12月8日にはクリスマスコンサートを開催しました。

天井が高いので響きも良く、メンバーの心のこもった演奏を聴きながら、フランス料理を堪能するという、至福のひと時を過ごせました。演奏前の近状報告&エピソードにも涙、素晴らしい演奏にも涙、感動の2時間でした。申し込み21人が欠席もなく参加できたことも大きな喜びでした。

ちなみに会場は、結婚式場で地元で人気の「柏日本閣」です。

コロナ感染予防対策として、広々とした宴会場、1人ずつパーティションで仕切られたテーブルをセッティングしていただきました。(おかげでほぼ会話は聞き取れない状況で、会話は少なかったです。)

今年の定例会も対面とオンラインの併用と、欠席した方向けの録画視聴の3本立てで、いずれかの形で参加でき

るようにする予定です。コロナに負けない柏ギロ友は、前進あるのみです。

(記/永澤昌江)



オンラインでもスペシャルな定例会 【石川支部】



昨年9月の定例会では、メンバーそれぞれが自宅からzoomを利用し、スペシャルゲスト、大阪支部の野村先生&池田先生をお招きして、ステキなオリジナル・アレンジアンサンブル&ピアノ連弾をお披露目頂きました！抜粋ですが演奏曲をご紹介します。

- ・ギロックの「こどものアルバム」から3曲・・・オリジナルメロディーをエレクトーンの音色にのせ、キラキラとステキに変身！

- ・池田奈生子さん、「スカーレットハート」Dメジャーのソロバージョン版にオリジナルメロディーをつけ結婚式やお祝いの席でも演奏。

- ・キャサリン・ロリン「ビーニー動物園」はアメリカでソロピースや連弾も発売されているそうで、連弾をご紹介します。ありがとうございました。

おふたりによるアレンジに、すっかり魅了されたひとときでした！

10月の定例会は引き続きzoomで安田裕子会長とのスペシャル交流会がありました。ちょうど、第18回ショパン国際ピアノコンクールの結果発表の直後ということもあり、少しショパンの話題にも触れ、なごやかに始めました。現地でのレッスン事情やギロックとの出会い、楽譜出版に至るまでの経緯…等、安田先生と画面を通してではありますが、直接交流することが出来大変貴重な機会になりました。

(記/富田美智子)



今年は大人の発表会を目標に 【山口PLIM支部】

山口PLIM支部では、月1回、「こどものためのアルバム」から1曲ずつ和声分析をして、作曲家の先生に確認していただいて理解を深めるようにしています。大人の発表会は昨年は開催せず、今年の開催を目標にしています。

(記/藤井ゆかり)



アップデートできる定例会 【富山支部】

富山はすっかり銀世界。道路状況が悪くなる時期ですが、オンライン定例会を継続しているため、天候に左右されずメンバーが集まっています。

「アクセント・オン2」の弾き合いも終了するため、次回は次の弾き合い曲集を決めることになっています。

月に一度の仲間との語らいは、学びの発見だけでなく心の支えにもなっており、定例会の後は自分をアップデートしてもらったような気分です。

(記/高野浩美)



アンサンブルも楽しめる定例会 【市川支部】

市川支部では、現在「アクセント・オン2」を中心に勉強しています。

ピアノで弾き合い、曲のイメージや構成、奏法などを研究するのはもちろんのこと、エレクトーンのアンサンブルができる部屋をお借りできたときには、管楽器や弦楽器、オルガンなどの音色を使って、にわかアレンジのアンサンブルを楽しんだりもしています。
(記/油井幸子)



柔軟に「いま」と向き合う 【仙台支部】

昨年、仙台支部は定例会が5回しか開催することができませんでした。しかし5月にホールでコンサートが再開できたのは、大きな喜びでした。

メンバーがそれぞれに、久しぶりに演奏する機会や教室の発表会をすることができて、柔軟に「いま」と向き合えるようになったのだと思います。

今年も状況を見ながら、無理なく活動をしていきます。

(記/小野寺朋子)



オンライン定例会が主流に 【枚方支部】



枚方支部では、昨年、ほとんどがオンライン定例会になりました。昨年最後の定例会では、轟千尋先生のテキストを使って、オンラインでクリスマス会をされた先生のお話を聞きました。オンライン定例会をしているうちに遠方から参加の方も増えたので、コロナ禍が収まって、対面とオンラインと両方で定例会を行っていきたいと考えています。他の支部の方ともオンラインで交流ができたかと考えていますの

で、またお声をかけていただけると嬉しいです。
(記/杉野みゆき)



西井葉子さん(伊勢市出身) ピアノコンサート 【伊勢・松阪支部】



ギロック伊勢・松阪支部メンバーは、コンサート開催をきっかけに、本当に久しぶりの再会を果たしました。

昨年12月19日、西井葉子さんピアノコンサート「ショパン〜ラフマニノフ」を開催しました。西井葉子さんは、日本とクロアチアを拠点に国内外で活躍される、伊勢市出身のピアニストです。クリスマスを前にサンタさんが、メンバーみんなの元気な笑顔と、西井葉子さんの素晴らしい演奏を届けてくれました！
(記/酒徳)



新刊案内 後藤ミカさん(宗像支部) 3冊の新譜を発表!

皆様こんにちは。後藤ミカです。2021年は夏から年末にかけて、大変なスケジュールでした。と言うのも、ほぼ同時に3冊の出版が決まったからです。どれも精一杯の愛情を込めて作りました。どうぞよろしくお願い致します!

●2月下旬発売予定

「連弾ハノン&スケール」
YAMAHA〜1人でも連弾でも楽しめる♪
おもしろ伴奏アレンジ♪〜



9年前からロングセラーを続けている「ハノンおもしろアレンジ」の姉妹曲集です。前回なかった曲に加え、楽しくスケールが練習できるアレンジも収録しました。

前はCD付属でしたが、今回は参考演奏&伴奏音源ダウンロード対応で、さらに便利♪楽しい曲がたくさんありますのでお楽しみに!

(表紙は多少変更があるかもしれません)

●3月中旬発売予定

ピティナ公募課題曲集「夜風と花火」

カワイ出版

今年もピティナの楽曲コンテストで2曲が選ばれ、将来の課題曲候補としてピアノピースに収録されました。曲集のタイトル「夜風と花火」は私の作品で、もう1曲は「だれかいるの?」という幼児向けの作品です。どちらも、子供たちが長い期間練習しても飽きないクオリティーを目指して作りました。ピアノピースのタイトルが自分の作品名になると、とても嬉しいです。

●3月下旬発売予定

「ファーストステージ」カワイ出版

2冊目のオリジナル曲集です。前回は少し昭和な響きで、なおかつ芸術性を優先しましたが今回は初めての発表会から使える曲が盛りだくさんです！ブルグミュラー程度までの26曲を収録。あえて繰り返しを多用し、簡単で子供がワクワクする曲集に仕上げました。「賢者の冒険」と言う小組曲もありますよ。詳細については発売後に、またご紹介させていただきます！



◆セオリーオールザウェイ◆ 小冊子販売中

各種テキストをレッスンで使っている先生にも、併用ドリルとして使えると思いますので、ご興味のある方は枚方支部の杉野までお問合せください。
(1冊1000円)



意外と気になる、隣の定例会☆パートII

長崎支部

コロナ禍の定例会

「ギロックの灯が消えないように」



(↑ストリートピアノで)



(↑密にならないように・・・定例会)

話から、そして、zoomミーティングに移行しました。

札幌支部のお誘いがきっかけで、合同定例会に参加させて頂き、一時期、コロナ感染流行が落ち着いた時はマスクを着けて街ピアノで演奏したり、即興連弾したりしました。

でも、また、コロナ感染流行がひどくなり、練習会場も貸し出しが禁止で、街ピアノも使えなくなり、zoomミーティングに戻りましたが、私自身も、肩の手術をしてリハビリと重なり参加できず、他のメンバーもたまたま、様々なことが一度に重なり、このまま、ギロック会を続けられるのか？心配になりました。長崎のギロックの灯を絶対に消したくない！と思っていた矢先に、練習会場から貸し出し再開のお知らせが来て、先日、1年10ヶ月ぶりに対面でのギロック定例会が開催できました。

やはり、対面だといろんなお話しができて良いですね。同じ場所、同じ空間で学べることの意義を感じます。まだまだ、いろんな問題はありますが、コロナ禍前からの大切なギロックの灯が消えないように、頑張っていきたいと思います。(記/福田)

◆長崎支部に限らずコロナ禍で、定例会はもちろんのこと、支部の活動を存続させることの難しさに直面した支部の声を耳にすることもあります。支部活動のお役に立ちたい、そんな気持ちで生まれた「隣の定例会☆」では、コーナーに登場してくださる支部を募集中です～◆

長崎支部ではコロナ禍が始まった2020年の4月から、定例会でオンラインを取り入れました。

…と言ってもオンラインが苦手な先生もおられて、最初はLINEのビデオ通

WakuWaku
ピアノフェスティバル 2021

wakuwaku ピアノフェスティバル2021開催 豊かな時間とともに・・・



昨年開催されたMEFO2021ピアノフェスティバルでは、ソロと連弾を合わせて286名のエントリーがありました。また、今回から参加した全員に賞が授与されることになりました。

フェスティバルのアワードでは、1部では各賞の授賞式、2部では安田会長はじめ、会員の小原孝さんや、松田昌さん、作曲家の春畑セロリさん、轟千尋さんをお招きし、みなさんの演奏を聴きながら、それぞれのコメントを交えつつ楽しいひと時をすごしました。また、日本ギロック協会会員の皆さんからなる実行委員の方々からは、フェスティバルの参加者一人一人に温かいコメントをいただきました。

(記/松原佳弥)

～ゲストコメンテーターの先生たちより～ ＜小原孝先生＞

前回よりパワーアップしたWakuWakuピアノフェスティバル、参加される皆さんもスタッフ側もオンラインでやる

ことに慣れてきて、着実に進化していきますね。普段はなかなか会えない講評の先生方と交流できるのも楽しみ。新しい形で音楽の繋がりを感じることができました。

これからまたどう発展していくかとても楽しみにしています。次回もまた皆さんの素敵な演奏が沢山聴けますように♪

＜轟千尋先生＞

音楽を心から楽しむお姿、音楽する喜びに満ちた演奏、ご指導の先生がたの多彩なアイデア、そしてご家族のご協力に応援……。

いろいろなかたちの『音楽愛』に触れられて、とても豊かな時間を過ごさせていただきました。ぜひまた聴かせてください！

＜春畑セロリ先生＞

すご～く緊張していたり、めちゃくちゃ楽しそうだったり、コスプレしていたり、はにかんだ笑顔だったり。み

なさんの素顔が垣間見られる演奏動画がとても微笑ましいですね。仲間同士で分かち合うような開催スタイルもとてもよいと思います。

課題曲制なので、惜しくもオンライン・アワードセレモニーに選出されなかった人も、自分と同じ課題曲の演奏や、それに対するゲストのコメントを、今後のヒントにさせていただけると思います。

＜松田昌先生＞

ワクワクピアノフェスティバル！とっても楽しい時間でした。楽しそうに・・・恥ずかしそうに・・・緊張してたり・・・なり切っていたり・・・色々な笑顔がありましたが、「みんなピアノが好きなんだなあ～！」と幸せな気持ちになりました。また逆に「ほとんど練習せずにレッスンにくる生徒さん」もいっぱいだろうなあ～！とも思いました(笑)。

子供のためのテキストを書きたいと思っているので、非常に参考になりました。このようなイベントが広がることを期待します～！

＜安田裕子先生＞

心に残ったのは、型にはまった表現でなく、演奏者一人一人の個性が強く伝わってきたこと。その上、課題曲を書かれた先生方の個性特徴を曲を通してピンピン感じました！一人一人の「人」を尊重することを学んだ素晴らしいイベントでした。





☆インタビュー☆



外傷外科医・内野隼材（うちのはやき）先生 『一番大切なのは、謙虚に学び続けること』



内野隼材先生プロフィール

1978年生まれ、子ども時代を兵庫県赤穂市で過ごす。カナダ、モントリオール総合病院外傷センターに外傷外科医として勤務。南アフリカへの留学経験を持ち、KwaZulu Natal大学、大学院修士課程を修了。

～「外傷外科医」、 医療について～

安田裕子（以下H）：私は、モントリオール総合病院のトラウマ・クリニックで、幸運にも日本人外科医の内野先生に診察を受ける機会がありました。

医療とピアノのレッスン、全く違う分野ですが、人が人に関わること、人に対して接するときの心がけなど、共通点多くあると感じ、先生にインタビューさせて頂きます。

内野先生、どうぞよろしくお話しします。先生を救急外科医とご紹介させてもらえばいいですか？南アフリカへも留学されているのですか？

内野隼材先生（以下U）：よろしくお話しします。

そうですね、日本では『救急外科医』という方がまだ少し馴染みがあるかもしれませんが、実際は『外傷外科医』と紹介させていただければと思います。



（中央 内野先生）

日本では消化器外科医や心臓血管外科医、脳外科医などは耳にしたことがあるかもしれませんが、『外傷外科医』という聞いたことがない、という人がほとんどだと思います。簡単に言うと、ケガをした人を専門に診る外科医であり、必要であれば頸部、胸部、腹部、そして四肢（の血管）の手術をします。

平和な日本では、交通外傷や墜落といったいわゆる鈍的外傷と呼ばれる外傷が多く、刺されたり、銃で撃たれたり、というような鋭的外傷の患者さんを診る機会が非常に少ない、というのが現状です。外傷外科医になる事を志し、修練を続けているうちに、このまま日本で修練をしても本物の外傷外科医にはなれないのではないかとこの思いが生じ、日本を飛び出すことになりました。まだ日本で修練していた時に参加した国際学会で、南アフリカから招待されていた外傷外科医の先生が、圧倒的な数の鋭的外傷の経験を報告されており、衝撃を受け、南アフリカ行きを決心しました。そしてこの南アフリカの先生が、後に私のモントリオールに来る事を強く後押ししてくれる存

在となる事を、この時は全く想像もしていませんでしたが、本当に色々な出会いに助けられている人生です。

南アフリカは素晴らしい国ですが、反面その犯罪の多さが世界的に有名で、いわゆる戦場を除いて、世界で最も刺創（刃物などで刺される人）や銃創（銃で撃たれる人）が多い国のひとつです。週末ともなると平均で15～20人刺された人、3～5人、銃で撃たれた人が運ばれてきて、その治療に当たります。そのような環境で一年間トレーニングをしました。さらに日本に帰国した後も、南アフリカのチームとは交流があり、私自身は南アフリカのKwaZulu Natal大学で大学院修士課程を修了しました。ですので、南アフリカには非常に思い入れがあります。

H：うわ～そうなのですか！まだお若いのに南アフリカで大切な経験をされたのですか？



～医師としての チャレンジ、心構え～

H：日本では中堅で活躍されていたと思うのですが、海外へ留学される大きな目的は何ですか？

日本にとどまり、いろいろ研究される先生も多いかと思います。学生でいうところの交換留学のような制度があるのでしょうか？

またモントリオールを選ばれたのはなぜですか？

U：そうですね、確かに日本ではだいぶ偉そうに出来る立場になってはいました(笑)。

カナダへ来た目的のひとつは、外傷診療のシステムを学ぶことです。

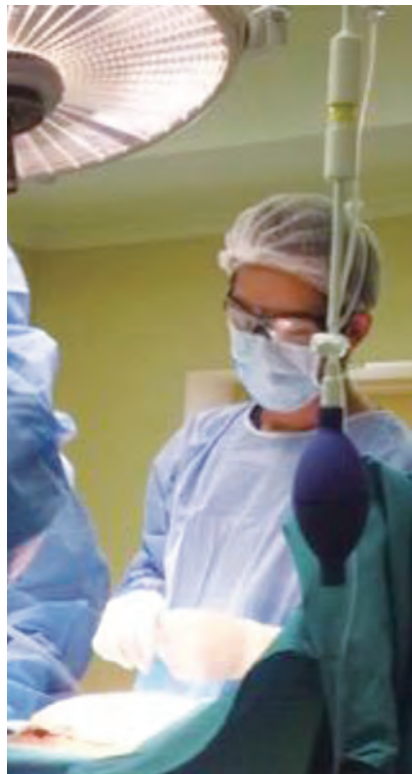
南アフリカに留学していた頃から、日本の外傷診療にはしっかりとした外傷診療システムが必要だと考えるようになり始めていました。というのが、世界、特にアメリカにはしっかりとしたシステムが存在し、日本よりも圧倒的にレベルの高い外傷診療がなされています。南アフリカから日本に帰国した後、帰国(着任)した病院からまずは始めようと、病院内のシステムを少しずつ変えていき、外傷チームを作り、外傷診療を行っていました。一つの病院にシステムを導入することはなんとか出来ました、同時に自分の最大の目的である、日本の外傷診療システムを変える、という事の難しさ、大変さに直面しました。そして物事を変えるには、まだまだ自分自身が未熟である、という事も改めて認識し、まずは自分自身が成長しなければならないと考えました。

先ほども少し触れましたが、世界にはglobal standardとされる外傷診療システムが存在し、多くの国がそのシステムにならい、診療成績を向上させています。その典型的な場所の一つがここモントリオールであり、20年前と比べると、その外傷診療の質の向上は目を見張るものがあります。そのような場所で学ぶことで、どのようにしてシステムを導入し、それを実行し、今現在に至ったのか、そういったことを直接感じ、学びたい、というのがこちらに来た一番の目的です。

また日本だけに留まらず、世界と繋

がる事の必要性を以前より強く感じており、コロナパンデミックでさらにそのglobalizationの必要性を強く認識し、語学を含めた個人的なレベルアップと世界との繋がりを求めてこちらに来た、というのも目的の一つです。

モントリオールに来ることができたのは、南アフリカ留学を決めたきっかけを作ってくれた外傷外科医の先生のおかげでした。南アフリカから帰国した後も南アフリカの外傷外科のチームとは色々と仕事を一緒にしていましたが、特にこの先生には非常にお世話になりました。この先生は南アフリカではもちろん、世界的にも有名な先生で、僕自身が外傷外科医を志した当初は雲の上の存在でした。まさか自分がこの先生とプライベートも含めてお世話になる日が来るなんて思ってもいませんでしたが、これも南アフリカに挑戦したからこそできた繋がりであり、何事も挑戦することが大切で、挑戦すれば、必ず何か自分の予想をはるかに超えるものを得る事が出来ると僕自身は信じています。その先生と今のモントリオールのボスがもともと知り合いで、僕のことを強く推してくれたおかげでこちらに来ることが出来ました。



H：外科のお医者さんはとっさの判断力が要求され、適材適時の処置が必要

です。そして患者さんの命を救わねばなりません。とても緊迫した瞬間だと思います。先生は傷ついた患者さんを目の前にされた時、どのような心の準備をされますか？

U：患者さんを受け入れ、診療を開始するまで、これまで緊張をしなかった事はありません。経験を積み重ねれば積むほど、物事に慎重になり、臆病になり、そして緊張します。この緊張を良い意味で力に変えているように思います。

患者さんを診る前には、限られた時間ですが、自分の中でいくつかのパターンをシミュレーションします。そして最後に大きく深呼吸して患者さんの治療を開始する、というのをルーティンにしています。そしてあまり感情移入をしたり、気負い過ぎたりしないようにすることを大切にしています。

いつもの日常が非日常になってしまう患者さんやご家族の事を思うとしんどくなることはありますが、手術の際にはその部分は分けて考えるようにしています。

H：ケガ人や病人にとってお医者さんは頼みの綱なのですが、一人一人患者さんは違います。それぞれ違う患者さんから大きな期待が医師にかかることにプレッシャーがかかることはありませんか？あるとすれば、どのように対処されているのでしょうか？

U：患者さんに頼られることは当然ですし、それに最大限応えたいとは常に思っていますが、あまりその事をプレッシャーに感じたことはありません。

ただやはりこの仕事をしていると、患者さんの死と向き合う必要があります。死を迎える患者さんには、一人の『ひと』として出来る限りの事をしたい、いつも思っています。この『ひと』の人生の最後はご本人、ご家族が納得いくものになったかどうか、もっと何かしてあげられることがあったのではないかと、いつも自問自答しています。医師という職業はその『ひと』の弱い部分へ入ることが許される数少ない他人であり、だからこそ、そこに責任があると思っていますが、ただやはりそれをプレッシャーとは感じていないように思います。



～人生の様々な場面で 出会う音楽～

U：音楽は人生において切っても切り離せない必要不可欠なもの、でしょうか。これまでを振り返ってみても、自分の人生の様々な場面で自分がどんな音楽を聴いていたのか、今でもすぐに思い出すことができます。

小学校の低学年の頃にもものすごく心を動かされた記憶があるのは、なぜか『おおきなふるどけい』ですね。

そして初めて買ってもらったカセットテープがBon Joviの「New Jersey」というアルバム、さらに初めて買ってもらったCDがGuns'n RosesのUse your illusion 1/2の2枚で、この中の楽曲を聴くと、その頃を思い出します。

小学校の卒業式（ニューヨーク日本人学校）でのヴィヴァルディの四季はなぜかすごく思い出に残っています。

中学から高校にかけては北欧系のHard Rock(HR)/Heavy Metal(HM)に、ものすごく思い出のある曲がありますし、この頃に観ていたドラマの主題歌なんかもすごく覚えています。

大学に入ると、music festivalに行くようになり、日本のロックバンドやヒップホップなどをよく聴いていましたが、中でもDragon Ash/降谷建志は今でもしんどくなった時によく聴いています。大学では少し背伸びをして、Jazzなんかも手を伸ばしましたが、長続きはしませんでした(笑)。

もちろん数多くの洋楽のロック、ヒップホップ、EDMなんかも大学の頃からずっと聴いており、Linkin Park、U2、Red Hot Chili Peppers、OASIS、Radiohead、Metallica、Black Eyed Peas、Eminem、Rihanna、などなど、色々と聴いてきました。

研修医一年目の頃に、本当にしんど

くて、よくふらふらになりながら、仕事終わりに通っていたレゲエバーで一人聴いていたBob Marleyの「Get Up Stand Up」はいつ聴いても、その頃のことを鮮明に思い出します。南アフリカではなぜか、ふとCREEDというバンドの曲が聴きたくなり、これをずっと聴いていましたし、南アフリカを代表する歌手のMariam Makebaなんかも聴いていました。

カナダに来る少し前はMIYAVIというギタリストの曲を聴いていました。というも世界で勝負をし、成功している数少ない日本人ギタリストであり、その生き方、楽曲が心に響いたように思います。カナダに来てからは、はじめの数か月は一人、真冬のモントリオール、全く異なった環境、とかなりしんどい時期があり、その時はJesse McFaddin (RIZEという日本のロックバンドのボーカル)の曲をずっと聴いて、自分を励ましていました(笑)。



(ご家族と共に)

H：先生のお母様はピアノの先生だったそうですね？お母様から受けられた影響はありますか？

音楽が好きになるきっかけや、コンサートの思い出などはありますか？

U：母親を尊敬していますし、色々と影響は受けていますが、ピアノの先生だからというよりも、母親の人柄だったりのような気がします。ただ常にピアノが身近にあったのは事実ですし、自分自身の音楽好きには少なからず影

響は与えてくれたように思います。コンサートにはあまり連れて行ってもらった記憶がないですね。もしかしたら母親は一緒に行きたかったのかもしれませんが、断っていたのかもしれませんが、覚えてはいませんが(笑)

ピアノは何度か挑戦したのですが、どうしても母親が先生になると、甘えも出ますし、嫌になればすぐにやめる事が出来る環境だったので、長続きせず、結局ピアノを弾けるようにはなりませんでした。今思えば、ちゃんと他の先生のところへレッスンに行っておけば、と思いますし、母親には申し訳ない事をしたな、と今でも思っています。

～謙虚に学び続けること～

H：さて、診療時の先生の間味のある対応にはとても救われました。なぜなら、患者にとっては、わからないことばかりで、心配すると余計に身体的疲労が増します。実際、精神的に自信を持たせてもらえると、回復が早いです。

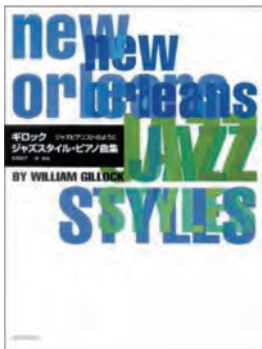
インタビューの最後に、医者としての信念やお考え(哲学)をお聞かせください。

U：いつまでも謙虚でいること、でしょうか。医療というものは常に進歩しているものですし、医師として『完璧』で、これ以上何も学ぶ必要のない医師など存在しません。何年医師をしても、見たこともないような症状を呈する患者さんや、これまで手術をしたことがないような外傷に直面します。そんな時に、仮に自分が『完璧』だと思いついていたら、おそらくこの患者さんを助けることは出来ないと思います。そして患者さんが重症過ぎた、何をしても助からなかった、と助けられなかった理由を患者さんのせいにしてしまうでしょう。

『謙虚に学び続ける事』、これが一番大切だと信じています。そして説明に関しても、僕自身がまだまだ学んでいる状況なので、患者さんが分からない事があるのは当然ですし、分からない事で不安になる事も当たり前です。ですので、分からない事があれば、しっかり説明をしてあげたいと思っています。

MASA先生とHillockのチャットdeギロック! 第10回

ジャズのリズムをとらえたい! 「ダウンタウン・ビート」



Hillockこと安田裕子(以下H):
マサ先生こんにちは!今回は、「ジャズスタイル・ピアノ曲集」より、私の大好きな「ダウンタウン・ビート」を取り上げたいと思います。いっぱい学びたいです。



MASAこと松田昌(以下M): 僕はこの曲を知らなかったのですが、ブルージーなテイスト満載の素敵な曲ですね?よろしくお願ひします。



H: 私はジャズの雰囲気が好きでピアノで自由に弾けたらいいな〜、と思うのですが、そのように訓練してこなかったので、弾けません。



M: ですよ〜!多くのピアノの先生が、同じように感じていらっしゃると思います。僕もジャズの専門家ではないのですが.....笑。ジャズを自由に弾くためには、安田先生がおっしゃるように、長い訓練が必要ですね。コードを覚えて、テンション・ノートと呼ばれる9度音、11度音、13度音に親しんで、ジャズのフレーズ(ブルーノートやジャズでよく使い方されるメロディー)を自分のものにしなければなりません。



H: やっぱり長い訓練ですか〜。でも、訓練なしでジャズが弾けたらいいのにな、とギロックに言った時、「だったら楽譜を見て弾けばいい!」と差し出してくれたのが「ニューオリンズ・ジャズ・スタイルピアノ曲集」でした。

ギロックの書く楽譜はジャズでも音の数が少なく、弾きやすいです。そしてそこから自分で何かを足していけるようにすればいいんですね!



M: なるほど.....。安田先生のその考えを支持します。ベートーヴェンの作品は、音を足したり(あるいは省略したり)、アーティキュレーションを自分流に変更することは考えにくいですが、ジャズの曲に関しては、弾き手が自分の考えで楽譜を変更することも可能だと思います。

この「ダウンタウン・ビート」の最初の和音A♭7でギロック

クは、下から「ラ♭・ミ♭・ソ♭・シ♭・ド・ソ♭」の音を使っていますが、第5音の「ミ♭」と9thの「シ♭」を省略することもできます。ジャズのサウンドの基本は、ベースに根音、コードには第3音と第7音が基本ですから、下から「ラ♭・ソ♭・ド」の3つの音があればいい。ギロックは、9th「シ♭」を含んだ少し重厚なサウンドが欲しかったのでしょね?また、メロディーには、フレーズごとにスラーがついていますが、このスラーを「レガートに滑らかに弾く!」という理解をせず、あくまで、「メロディーとしてのまとまり」と受け取って、楽譜にはないアクセントを付けたり、隙間を開けて演奏なさることをオススメしたいです。



H: なるほど!ジャズではクラシックの決まりから飛び出して、自分の感性を信じて弾けばいいのですね!マサ先生、このようなジャズスタイルはなんというのですか?



M: ん.....?わかりません(笑)。ただ、思い出す似たイメージの曲は、ヘンリー・マンシーニの『ピンクパンサー』、ガーシュインの『サマータイム』。出だしのコードは、『JOR DU』や『IN A MELLOW TONE』という曲とよく似ています。



H: そうなのですね。そして出だしから、左手がほとんどVI-V-Iですが、この最後のIはIの6でいいのですか?



M: そうですね。3つめのコードはCm6(シー・マイナー・シックス)で、Cm(ド・ミ♭・ソ)よりも6の「ラ」が加わることで、サウンドに何というか「切なさ」が生まれています。コードの響きは結局は音程の集合ですから、この場合は第3音の「ミ♭」と6の「ラ」が増4度であることがCm6のサウンドを作っていると思います。

少し長くなりますが.....。この曲を日本のジャズミュージシャンが見たら、「逆循」の曲と言うと思います。「逆循」とは「逆循環コード」の略。「循環コード」は、「I度、VI度、II度、V度」のコード進行のことで、例えばシャンソンだと『ラ・メール』、昔のロカビリーだと『ダイアナ』、ジャズですと『ブルームーン』とかマイナー循環コードの『朝日の如くさわやかに』があります。「逆循」は、循環コードをII度からスタートして「II度、V度、I度、VI度」という

コード進行を言います。具体的な曲としては、『サテンドール』のBの部分、『ウエーブ』のBの部分など。そしてこの『ダウンタウン・ビート』では最初のコードのⅡ度を、代理コードの♭Ⅵ度にしてギロックは使っています。実は、今の日本の若者に大ヒットしている、YOASOBIの『夜に駆ける』などのコードも、「逆循」コードなのです。話がややこしくてすみません。m(_ _)m



H: 逆循っておもしろいですね！楽譜の2ページ目、1段目2小節目、左手のリズムですが、今までに色々な弾き方を聴きました。このような場合もその拍内であれば、自分が心地よいリズムで弾けばいいのですか？



M: う〜ん、実際に聴かせていただかないとわかりませんが……。このようなメロディーの間隙に入れるリズムは、いろいろと考えられると思います。人によって感じ方は違うだろうと思います。



H: MASA先生に質問です。このような曲をかっこよく聴かせるための秘訣があったら教えてください！



M: この質問に対する答えは、人によって全く違うでしょうね……。笑。僕はジャズのリズムをとらえることが大切だと思います。それは2つあって、拍をタイトに感じることに、ウラにあるアクセントを感じることに。具体的には、まずは左手から……

①コードの1番下の音を使って、4ビートのベースラインを左手で弾いてみる。例えば1小節目は4分音符で「ラ♭・ラ♭・ソ・ソ」2小節目を「ド・シ・シ♭・ラ」と。コードは繰り返されますから、ベースもこのラインを何度も繰り返します。

②ベースラインの流れを理解したら、ジャズの特徴であるアフタービートを、2拍目と4拍目を強く弾いて掴むことが大切です。ポイントは、2・4拍を強くというより、1・3拍を弱く弾くことかもしれません。ドラムのアクセントの位置でもあります。

③その時、4分音符一つの中に3連符を感じることも大切だと思います。

④右手は、ギロックが「付点8分と16分音符」で書いている「ターータ」のリズムを「タウタ」という3連符と感じて、3連符の最後の音（楽譜では16分音符）にアクセントを付けて弾きます。

左手は、4分音符の2拍目と4拍目にアクセント、右手は

16分音符にアクセントをつけることになりますから、かなり練習が必要です。会員の皆さんが、やってみてくださると嬉しいな~~~~！



弾いてみた！（西宮支部）

3つのジャズ組曲

グレンダ・オースティン



昨年秋に発行されたグレンダの「3つのジャズ組曲」には、第1番から第3番までが収められています。第1番は「クラッシー・ジャズ・ポケット（全音）」にも掲載されているので耳なじみの方も多はず。「クラッシー・ジャズ・ポケット」に掲載されているのは、ソロピースとして出版された旧版で、「3つのジャズ組曲」は新版がもともになっていることです。プレリュードはウィットに富んでいて、間奏曲は色彩の変化がおもしろく、フィナーレはわかりやすいジャズスタイル。第2番、1楽章はニューオーリンズやバーボンストリートなど、まるでアメリカ南部のジャズが聴こえてくるよう、2楽章はいきなりの「ハッピーバースディ」ソング？メンバー同目が点になりながらも、若い感じがいいね！で意見がまとまり、3楽章はリズムの楽しさ、譜面のスッキリ具合に高評価です。第3番、1楽章はマリオの世界、電子楽器で演奏してみたい、2楽章は、さわやかなCMのBGMを思い出す、3楽章は、Fdurで間違えて弾き始めて、あわててf mollで弾き直したのに、「（調性が途中で変わったことが）わからなかった」と大爆笑。この曲の持つリズムの特性かもしれません。（記/前田陽子）



<長すぎる！編集後記>

昨年、音楽の世界では、ショパン国際ピアノコンクールがあり、大いに歓声の沸いた年になりました。YouTubeで各国へライブ配信、しかも映像は4K！（ポーランド政府、頑張ったそうです）アーカイブも充実していて嬉しい限り。ギロックの皆さんも、きっと「推し」のピアニストを見守り、新しい「推し」も見つけて（笑）出演時間によっては深夜にパソコンやスマホをこっそり開き、寝不足のままレッスンの日もあったのでは？

私がギロックと出会ったのは、音大生時代です。友人の勧めもあり、楽譜屋さんの棚から「こどものためのアルバム」を手に取りました。ブルクミュラーのレベルに近い、作品によってはロマン派、印象派、近現代もある・・・あくまで一人の作曲家として出会いました。まだ自分が、生徒への教本として選ぶ立場ではなかったのです。もちろん、その後、レッスンで生徒たちとともにギロックを学びました。協会では、全国のギロック仲間と出会い、ギロックに対する皆さんの熱い思いを受け止めて、現在もギロック勉強中です。

あれから20年、30年という時を経たということは、私が楽譜屋さんの棚からギロックを手にとった頃に生まれた子どもたちは、ギロックも珍しいものではなく、当たり前のようにギロックに親しみ、成長した子どもたち・・・つまり、2021年にショパン国際ピアノコンクールに出場しているピアニストたちは、幼い頃にピアノ学習者として、ギロックに触れることが出来ていたということでしょうか。感慨深いものがあります。

ところで、昨年のショパン国際ピアノコンクールは、かつてないほど、「様々な個性」がファイナルステージに登場したことで話題となりました。あちらこちらで目にした「ショパンらしさとは」という記述も・・・。

私たちが定例会で、自分とは違うスタイルのギロックに出会ったときに、新鮮な気持ちになります。自分のギロックを見直すことにも繋がります。定例会に限らず、外の世界で出会うギロック、時として抱くほんの少しの違和感。「なんでもあり」と「個性」は少し違うような気も・・・。

先ほどの「ショパンらしさ」とは、例えばショパン国際ピアノコンクールのピアニストたち、もちろんそれぞれの個性はあっても、一流のテクニック、学びの深さ、皆、若いけれどそれまで積み重ねてきた経験など、揺るぎのないものがあり、決してぶれないものがあります。

そして、異口同音に「ショパンへ敬意を持って」。

個性の中に、ショパンらしさの生まれる理由が、ここにあるかもしれませぬ。

未だにコロナ禍の影響を大きく受けている私たちの生活ですが、それでも希望を持って、新しい年が良いものでありますように、2022年もどうぞよろしくお願いいたします。（編集部/前田）